

WebWiki2.0を用いた美術教育実践力の育成

安東 恭一郎・石井 都*・吉原 功雄*・金丸 高士**・長尾 万樹子***
(美術教育) (附属高松小学校) (附属高松小学校) (附属高松中学校) (附属坂出中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*760-0017 高松市番町5-1-55 香川大学教育学部附属高松小学校

**761-8082 高松市鹿角町394 香川大学教育学部附属高松中学校

***762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校

The Trial of Teaching Practice in Art Education by WebWiki 2.0

Kyoichiro Ando, Miyako Ishii*, Isao Yoshihara*, Takashi Kanamaru**
and Makiko Nagao***

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Takamatsu Elementary School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,
5-1-55 Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

***Takamatsu Lower Secondary School Attached to Education Faculty of Kagawa University,
394 Kanotsuno-cho, Takamatsu 761-8082*

****Sakaide junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,
1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

要 旨 本稿は附属学校園との協同で、WebWiki2.0を用いて学部授業・図画工作教育法の学生たちが、附属高松小学校の授業実施に向けて展開していく状況と過程に関する考察である。学生たちは個別のWebPageを通して学生、大学教師、附属学校園教師が授業造りを共有し、授業実践に取り組んでいった。学生たちは附属学校の教員から支援を得ながら、実践的な授業を体験でき、座学や模擬授業では得られない充実感と課題を獲得することができた。

キーワード WebWiki2.0 附属学校園 教育実践 教師力量形成 図画工作

1. 研究の目的、特色、方法

(1) 研究の目的

本研究はWebWiki2.0 (以下WebWiki) を授業のツールとし、附属学校と連携協力すること

で図画工作の授業実践力を培うことを目標とする。この研究・授業において学生たちに期待する実践力とは、「図画工作の授業を構想する力量形成 (授業構想力)」「児童の取り組み状況を理解し支援する力量形成 (児童理解力)」「図画

工作の授業状況を把握でき改善できる力量形成(授業改善力)」である。

(2) 研究の特色1・WebWikiによるグループ学習

本研究の特色の第1点は、学部教育と教育実習を切り離れた学習環境とせず、学部教員と附属学校教員とがWebWikiを通じて教育実習前の2年次から学生の学習状況を把握し、学生相互・学生と教員によるネットワークを学部授業に組み込んだことである。このネットワークが構築されることで、学生は授業時間外に授業について学生同志あるいは教員と連絡を取り合ったり課題の進行状況をネット上でお互いに確認できたりする。

グループ学習(本研究はグループ学習で展開する)の課題の一つに授業時間外にグループ内の学生同士がミーティングを持ちにくいことがあげられる。このため、本研究では、学生グループと個々の学生にそれぞれWebWiki2.0によるWeb上で編集可能なWebPage(以下WikiPage)を準備した。

このWikiPageを利用することで、授業時間外においても、学生は公共のネット環境のある場所や自宅などで時間を問わずグループメンバーに出会い、課題を作り上げていくことができるようになった。

また課題を進める中で問題解決できない場合は、各自のWikiPageのコメント欄を利用して担当教員や附属学校教員に質問しアドバイスを受けることとした。

このようなWebWikiのシステムを利用することによって学部と附属学校は連携して学生支援をすることができ、また、学生は授業研究の状況を逐一記録し、学生同志で閲覧したり、複数の教員からそれぞれ観点の異なるアドバイスを受けたりすることができる。

(3) 研究の特色2・WikiPageの更新を通じたコミュニティの形成

本研究の特色の第2点は、学生自身がそれぞれに準備されたWikiPageを課題ごとに新規作成し全体として自分のサイトを成長させていくことである。また、学生はPCルームパソコン

や自宅のPCあるいは携帯端末(WebWikiはスマートフォンに最適化されている)などを用い、授業終了時から次回授業時までの間に、学習課題や授業実践計画案などをアップロードして、授業の前に教員のアドバイスを受けることができる。

また、お互いのWikiPageは受講生間で公開されるので、学生は自宅PCや通学途中の携帯で日々更新されるWikiPageを相互に閲覧し、いつでも自分自身の授業の理解度を相対的に把握したり、自分のページに書き込まれたコメントを読んだりする。そして、他の学生にコメントを書き込んだり意見交換したりすることができる。

一方、当授業Webサイトは図画工作教育法Webサイト以外の授業関連Webサイトとリンクしているので、学生は当該授業を越境して他の授業を閲覧したりコメントを加えたりすることができる。図画工作教育法に関連付けられているWebサイトは「幼児造形教育法」「中学校授業実践研究」「美術教育内容学」とした。

(4) WebWikiの利用方法

WebWikiを用いた授業運営をしていくため、以下のような設定をした。

- ・受講生に授業専用IDとパスワードを発行する。その際、学生から日常的に閲覧でき常時連絡可能なメールアドレスを登録させ、授業連絡の一斉メール配信ができるようにする。
- ・WebWikiの利用方法に慣れるため、最初は各自の「気軽に出来る美術表現(コピーアートペーパーによる表現)」のページ作りを課題としてページを作り、グループ内でコメントを書き合うようなコミュニティページ作りを先行させる。
- ・毎回の授業実施前に一斉メールで、「次回授業の講義内容のWebサイトを訪問して予習しておくこと」および「次回授業に必要な準備物や課題について」(図3・授業案内メール)確認するよう連絡する。
- ・課題によっては、お互いのサイトを訪問

して感想や意見のコメントを加えるよう指示を与える。

- ・授業指導案の計画段階から附属学校の先生方に担当グループを指定した上で、それぞれのグループにコメントやアドバイスをを入れていただくよう依頼する。
- ・本授業のピークとなる「附属高松小学校での授業実践」に向けた「授業計画」「模擬授業（2回実施）」をグループWikiPageにアップロードし、附属学校園の先生方からその都度アドバイスを受けページを更新する。

「附属高松小学校・授業実践」はグループWikiPageで「授業記録・授業反省」として掲載するよう予めテンプレートを示しておく。

2. 学部授業・実践授業の取り組みに向けた附属学校との連携体制

（1）研究組織

本研究の対象とする授業は学部後期授業「図画工作教育法」である。また、本授業は附属学校園との共同によって展開することとし、研究協力者は以下の図画工作・美術担当教員とした。<附属学校・研究協力者>

「附属高松中学校・金丸高士」「附属坂出中学校・長尾万樹子」

「附属高松小学校・吉原功雄」「附属高松小学校・石井 都」

（2）対象授業・学年・時期および実施方法

学部授業・図画工作教育法で児童生徒を対象とした授業を実践していくためには本学附属学校の協力が不可欠である。特に本研究では、学部の通常時間に学生が附属学校に出向き、附属学校で授業実践を行うことを授業内容に組み込んでいるため、学部と附属高松小学校との授業時間の調整や対象学年の選定など事前の協力体制の準備と調整が必要である。

附属高松小学校との協議に基づき対象学年は6年生3クラス、実施時期は12月21日とした。なお、本報告では附属高松中学校の実践研究(附属高松中学校の実践研究では対象学年を3年生・

選択美術授業・実施時期は前期6月とした)を試行研究とし、ここで得た知見をもとに附属高松小学校での実践を取り扱うこととした。

（3）授業実践前の準備

附属学校で授業実施前に訪問観察する回数に限られるので、授業実践前に対象となる学級の図画工作の授業の様子・雰囲気把握したり、個別の児童生徒の学習状況を事前に確認したりしておくことも必要である。そこで学部授業内で事前に附属学校の図画工作の授業における児童生徒の学習状況が把握できるよう以下の方策について試行した。

- ・附属高松小学校での実践に先立ち、対象となる6年生・クラスの図画工作授業の様子（9月の図画工作授業）についてビデオレターなどを附属高松小学校吉原先生に作成していただき、児童の題材全体の取り組みの様子や制作表現物などを学部授業で紹介した。
- ・個別の児童生徒の美術活動における課題について学部授業で事例をあげて紹介した。

3. WebWikiを利用した附属高松小学校における授業実施の計画・方法

（1）授業実践へ向けての取り組み・グループ編成

本研究では、図画工作教育法において初等図画工作の基礎（学習指導要領の読み込みと授業設計の方法）を学んだ後、授業実施グループ6名を編成して、グループごとに教材作りを行った。附属高松小学校で授業実践させていただく学年は6年生で同一時間帯に3クラスを全て開放していただいた。通常授業では一人の教師が1クラスを担当することになるが、今回の取り組みでは学生1グループが、児童8名程度の1グループを対象として授業実践することとした。このように学生グループが個別の児童グループを担当することで、全ての学生は授業当事者（教師役、補助役、記録役など分担）となり、6年生3クラス・児童15グループ、学生16

グループでそれぞれ個別の題材を作成し授業に臨んだ。

題材開発する学生に1グループは6名で編成したが、附属高松小学校で実際に授業する場面では、6名の学生グループを3名の2グループに再編成し、同様の題材を別々のクラスで実施した。これにより授業後の反省会で同一題材から生まれる差異について指導論、教材論の立場から検討させることとした。

(2) WebWikiによる附属学校教員の支援

6名の学生グループは、実施する授業について立案し、学部で模擬授業を実施して教材を吟味・準備し内容を検討した。ここで作成した指導計画は随時グループWikiPageにアップロードし、担当をお願いした附属学校教員から適宜アドバイスを得た。また、学習指導案作成の段階では指導案書き込みテンプレートを提示して、随時学生が書き加える方法によりグループ全体の統一を図った。

学生グループは授業実施に先立ち、児童が取り組む題材における工作や絵画表現などを試み、附属学校教員に対してその都度作品をアップロードして児童に対応できる教材となっているかを確認したり、授業展開で必要となる準備物について意見を求めたりした。

本授業実践は小学校での展開となったが、この段階から附属中学校の教員にもアドバイザーとして各グループに対して意見や支援をしていただいた。

(3) 学生グループ活動における留意点・共同著作物

授業実施の準備段階では「題材の決定」「学習指導案」の作成、そして授業実施時における役割分担を明確にしておくことを求め、それぞれの取り組み分担・責任をWikiPage記録において氏名を明記することとした。今回のグループ実践授業は「共同著作物」となるが、授業構想・授業著作においてそれぞれがどの部分において何を寄与したのか、個別のオリジナリティはどの箇所を確認出来るのかを明確にさせることで、責任分担があいまいになりがちなグループ活動の役割分担・取り組みについて明確化さ

せた。

(4) 授業研究・計画と反省・題材の比較

本取り組みは実際に授業することによって、「授業を計画する・構想力」の獲得だけではなく、授業を記録し反省的にとらえ発展させ、これら授業の振り返りについても附属学校教員からアドバイスをいただくことで、授業実践研究が「構想・実践・反省・再構築」全体であることを経験的に理解できるように授業全体を設計した。

4. 附属高松小学校での授業実践場面の準備

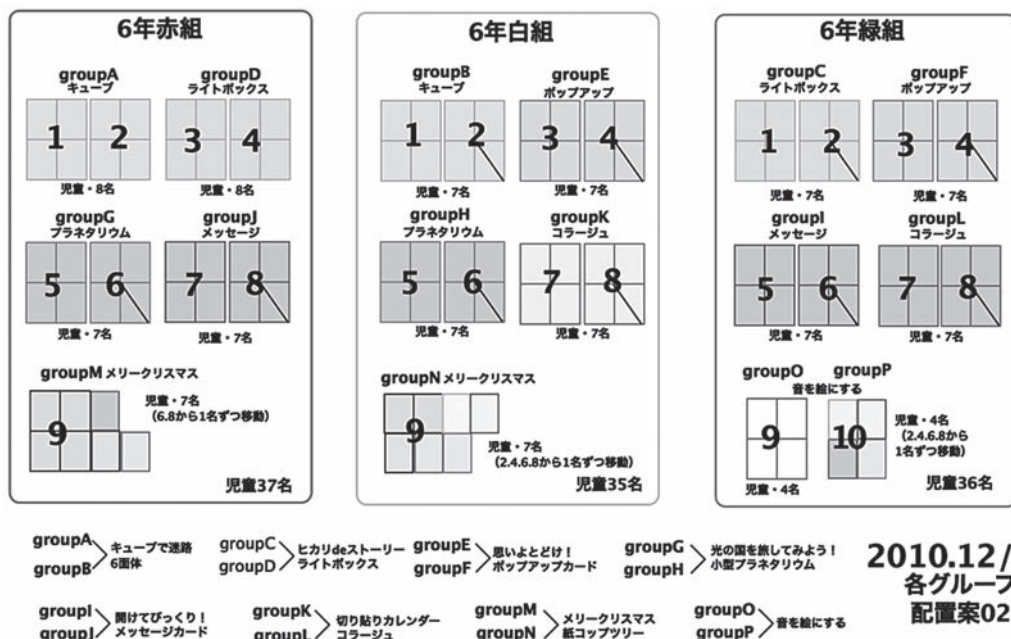
(1) 附属高松小学校における授業の設定

本授業のピークは実際に児童と共に授業を展開していく場面である。本学部授業の授業時間は、毎週火曜日13時から14時30分までとなっているが、附属高松小学校と学部授業時間帯はうまく重ならないため、特別に授業時間をずらしていただき本研究授業の実施を13時35分開始14時20分終了とさせていただいた。当日の学生グループ・題材と6年生児童のグループ編成は<図1・附属高松小学校でのグループ配置図>に示す通りとした。

学部授業学生8グループ(6名×8グループ)は、グループ毎に題材を検討し準備した。そして、授業実施場面では、学生1グループは6名体制から3名一組(3名×2×8)となって、3名一組の学生グループが児童8名程度を担当し授業実践した。

したがって、この実践授業では、6年生全体で8つの題材が、児童16グループでとり組まれたことになる。

学生グループはこの実践に先立ち「授業案」を作成し、WikiPageに公開して附属学校の先生方から授業展開のアドバイスや用具の取り扱いなどの支援を受けた。また、実践までに学部授業で二回の模擬授業を行い、受講生の多くは生まれて初めてとなる授業実践に備えた。



＜図1・附属高松小学校でのグループ配置図＞

(2) 仮想 (WebWiki) と、現実 (授業実践) の統合を目指して

本研究ではWebWikiを授業のツールとするが、こうしたWebコミュニティによって形成される学生の相互交流場面は、現に生きて活動する児童生徒の中に関連していくことによって相互補完され、さらに新たな局面を切り開いていく。すなわち学生たちはWeb上で授業の構想について計画したり学部授業で模擬授業をしたりして授業を構想するが、実際に小学生を相手に授業をすることによって得られる感触はWebコミュニティや学部模擬授業とは全く別次元の体験であることがわかり、授業のリアリティをここで味わうことになる。

学生たちは12月21日13時20分までに附属高松小学校の6年生教室前廊下に待機し、児童が昼の掃除を終え授業の準備に取り掛かるのを待った。

グループKの学生は、これから始まる自分たちの授業が児童にどのように受け入れられ展開するのかを緊張して待つ場面を以下のように記している。

「・・・最初附属小学校に行って、子どもたち

に会ったときはよそ者が入ってきたという感じでかなり居づらかったです。しかし、授業がいざはじまってみると、とたんに子どもたちは私たちの準備した授業に食いつき驚きました」

学生たちはグループで試行錯誤し模擬授業を通して構想してきた授業を、実践し検証する場面を迎えることとなった。

5. 附属高松小学校での授業・授業から得られるリアリティ

(1) 授業開始場面・学生グループ役割の紹介と学習課題の提示

それぞれの配当グループ (児童7～8名) を担当する学生グループ (2～3名) は、児童の前で簡単な自己紹介と役割分担 (教師役・記録役・授業補助役) を伝えた後、授業を開始した。

児童たちは学生たちの準備した素材や用具が与えられ、授業説明を受けた後、作業を始めた。1クラス・異なる5題材が一斉に始まるのでクラスは全体として騒然とした状況であったが、それぞれのグループの児童たちは担当の学生の説明や提示に耳を傾け、それぞれの課題を

つかむと活動に取り組み始めた。

(2) 図画工作における「児童の発想」に関する気づき

図画工作・授業開始時、児童は教師の設定した基本課題を受けとめ、活動を開始していく場面となる。学生たちは自分たちの準備した題材を児童に提示し、児童はそれぞれ試行錯誤を始めた。この場面、学生たちは一方で児童の発想力の豊かさに驚き、他方で発想を導く困難さを痛感し、この感想を以下のように授業記録に残している。

<子どもたちの発想力は想定外に素晴らしい>

「子どもが発想した考えは、私たちが予想していたものの遥か上をいっていた。あらかじめ教師が作る作品を提示するよりも子どもたち自身に考えさせ、工夫させるほうが子どもたちの自由な発想ができ、面白くて素晴らしい作品ができると感じた(グループD)」

「想像していたよりも子どもたちの表現は自由で、想定したものとまったく違う作品を発想してくれてうれしかった。作業中の子どもたちはいきいきとしていて、楽しんで作業していたのを見てほっとした(グループE)」

「子どもたちは、私たちが思っているよりもずっと発想力にたけており、私たちでは思いつかないような発想をたくさんして、私たちを何度も驚かせた。この発想をもっと伸ばしてやるためにはどうしたらよいか考えなくてはならないと思った(グループG)」

「イメージをつかんだり、工夫の仕方を学んだりする作業は子供たちがどんどん自分で工夫していき、正直教えようと思っていたところをすべて先にやられてしまったという感じで拍子抜けしてしまいました。・・ほんとうに、ここまでできるとは思っていなかったし、こどもの才能に驚かされました(グループK)」

<発想を引き出したり、戸惑う子どもを支援したりするのは難しい>

「授業を通して、教材自体に興味をわかせて『こんなの作りたい!』と簡単に構想できるような題材で授業をすることは、とても難しいことだと思いました。・・子どもから『何描こう

かなあ』と相談されたとき、いいアドバイスができなかったりしました(グループA)」

「子どもたちが思っていた以上に、メッセージカードを贈る相手やイラストを思いつくのに時間がかかってしまったのでその場合の対応を考えておくべきだったと思います(グループH)」

「子どもは思っていたよりも作業に時間がかかるということがわかりました。できるだけ内容を省いて、わかりやすくしたつもりでしたが、作品の作り方などがつめれてなかったのので、説明する時に時間がかかってしまいました(グループJ)」

「最初に私たちが作った作品を見せることで、イメージが膨らむかと思ったのですが、見本を真似しようとする児童が多く、かえって児童の発想力の範囲を狭くしてしまったかな、と思いました(グループM)」

「児童の発想を膨らませるために参考資料を持って行ったが、上手く取り入れられる児童とそのまま真似になってしまう児童がいるので、資料に頼るよりも効果的なアドバイスを考えた方がよかったかもしれない(グループN)」

(3) 授業支援に関する気づき

児童の造形活動の具体的支援の方法は、授業の構想や模擬授業だけでは気づきにくい。今回の実践では学生が指導した児童は7名~8名と少人数であったが、支援者の一言が児童の表現に影響することを反省したり、複数の児童を一度に支援することの難しさを感じたりして、授業支援の在り方についての課題を以下のように授業記録に残している。

「グループワークにしたことでお互いの工夫を見て自分の作品に生かしている様子が見られたことから、個人だけでなくグループであるという形をとると、さらなる工夫に繋がりみんなで表現方法を共有できるのではないかと考えた(グループC)」

「作っているものがそれぞれ違っていたので、進行を揃えることができなくなり、効率よく進めることができなかったので、作業時間が短くなって完成できない児童もいた。今回は、口頭

での説明だったのだが、作り方を図にしたものを使って説明すればもっと分かりやすくなると思った（グループE）」

「この授業を通して、子ども一人ひとりをきちんと理解し、その子の表現したいものにできるだけ近づけられるような支援ができ、児童を手助けすることが、授業者に求められるということがわかった。できないからといって、その工程を教師がやってあげるのではなく、あくまでアドバイスまたはヒントを提示することで子ども自身で作業が行えるような支援をすることが大事であるということを感じた（グループE）」

「声かけが特定の子に偏りがちだったので、もっと子どものまわりを歩いてまわったらよかったです。製作時間を延ばした分、振り返りが雑になってしまったので、もっと作品の作り方をわかりやすく的確にまとめて、時間を短縮できたらいいなと思いました（グループJ）」

「子どもたちに「こうしたら？」とアイデアをだして子どもを手助けしようとしたのだが、子どもは（支援者の意見を）そのまま受け入れてしまい子ども自身のアイデアとならなかった。アドバイスはできるだけもっと抽象的なイメージで説明したほうがよいと思った（グループK）」

「実際に授業をするときに一番必要だと感じたのは、支援者として児童が作品を作りやすい環境を作ることが大切であるということだった。作品を作るとき、自分のなかに作品のイメージはあっても、それをなかなか表現することができない児童は、人に見られることを気にしていたり自分の作品が評価されることに対して不安感を持っていたりしていると感じた。今回の模擬授業でも、授業としての時間が終わった後、友達と一気に作品を仕上げた児童もいた。授業の中で評価の対象となる作品を作らなければというプレッシャーがなければ、児童はもっと自由な表現活動ができたのだろう、ということを見せられたような気がした（グループP）」

（4）学生の授業実践記録のアップロードと、

附属学校教員からのアドバイス

学生グループそれぞれが授業実践記録と反省をアップロードした後、WikiPageを附属学校教員に閲覧していただき、授業取り組み・記録に対してコメント・アドバイスをしていただいた。1月最初の授業で附属学校での実践について、それぞれのグループ取り組みと反省・改善提案の発表会を行った。この時、附属学校教員からいただいた教材の内容構成に対する具体的な課題を参照し、今後取り組んでいく「教材研究」の方向性についても検討し発表した。

6. 本研究の到達点と課題

授業構想力については、まず学部授業前半で学習指導要領の図画工作の変遷を学習し、この中で図画工作の支援の力点は技術・知識の獲得にあるのではなく、児童の発想構想力の育成を柱とする授業を構想し授業設計の基本とすることを確認した。この段階でWikiPageに学生の関係する教科と図画工作の学習指導要領とを比較して、その共通点と相違点とをまとめたページをアップロードし、グループ内でお互い閲覧した。次に個人で図画工作指導案をWikiPage上で作成し、ネット上で受講生相互に授業案を閲覧・検討し、グループ共同で取り組む題材・指導案を決定した。そして、授業内でグループ討議を重ねたり模擬授業を実施したりして、グループとして実施する授業を構想した。学生グループは授業内だけではなく、授業後もWeb上で授業実施計画について確認したり教員からのアドバイスを受けたりして授業を構想した。また模擬授業で制作しきれなかった参考制作物も予め各自WikiPageに提示することで制作過程や作品イメージを共有した。

児童理解力については模擬授業やWeb上での授業設計に基づき、附属高松小学校で授業実践することによって、学生たちは自分たちが予測し準備していた構想からは得られなかった「児童の発想力の豊かさ・発想力を引き出す支援の重要性」を受けとめることができた。

授業改善力については附属学校での授業記録・評価・課題をWikiPageで提示し、附属学

校の先生方からのアドバイスを受けた。また、附属高松小学校での実践において同一題材を2グループでそれぞれ実施することで、授業後相互に授業記録を閲覧してその共通点と相違点を比較し検討することで題材研究の手掛かりとした。

これらの取り組みによって学生たちは図画工作授業の全体像を一通り体験し、その詳細な記録を残す事ができた。他方、今回の取り組みはグループ単位での実践であり、通常授業のように一人の指導者がクラス全体を対象とした授業となっていないこと、附属学校での実践が一回・45分に限られていたこと、実施した授業が図画工作カリキュラム全体から検討されていないこと、などがあげられる。

さらに本授業で用いる図像使用などにおいてWeb上ではWebで公開されているため、図画工作授で用いる図像使用などにおいてWeb上で掲示できないコンテンツもあり、著作権への説明が不十分であったこともあげられる。

またWebWiki利用において、下宿生などWeb利用のPC環境が十分でなく自宅でアップロードできなかつたり、携帯電話利用において一部不具合があり内容全体が表示できなかつたり、さらに課題提出日にサイトアクセスが集中して一時サーバーに繋がらなくなる、などの課題もあった。今後こうした諸課題について検討・改善し、附属学校と共同したWebWiki利用における授業実践力育成を目指した授業を構想し展開していきたい。

謝辞

本研究は、平成22年度・教育学部・附属学校園教員の共同による共同研究プロジェクト『WikiWeb2.0を用いた美術教育実践力の育成』の援助を受けたものである。